

日本インカレ女子 100m の史上初上位独占への取り組み 組織の現状と課題に対する実践報告

伊東浩司

甲南大学全学共通教育センター
神戸市東灘区岡本 8-9-1,658-8501

要旨

「2023 年に開催された第 92 回日本学生陸上競技対校選手権大会女子 100m」において、甲南大学から出場した 3 名の学生が 1 位から 3 位を独占し、これは日本学生陸上競技対校選手権の歴史で初めての快挙である。しかし、正課外活動に対して満足できる各種支援・指導体制がない状況下で、3 名の学生に対するコーチングが行われている。この実践報告では、そのコーチングの報告と今後の課題と取り組みに焦点を当て、課外活動団体としての意識向上や、ティーチングよりもコーチングの重要性について述べ、今回の成功の背後には不十分な支援体制などにもかかわらず、学生の努力とコーチングの効果が大きく寄与していると考えている。今後の課題に対する改善策などについても述べていきたい。

キーワード： 正課外活動 陸上競技 女子 100m コーチング チームビルディング

1 はじめに

2023 年に開催された第 92 回日本学生陸上競技対校選手権大会（以下、日本インカレ）女子 100m において、甲南大学（以下、本学）は歴史的な快挙を達成した。この大会は日本学生陸上競技の頂点であり、本学から出場した藏重みう・岡根和奏・奥野由萌の 3 名（以下、3 名）の学生が女子 100m で上位 3 人を独占した。同一校が女子 100m で上位 3 人を独占するのは、2023 年度で 92 回目を迎える日本インカレの歴史において初めての快挙である。本学は、課外活動に対する学費・入学金免除制度などの支援がほとんどなく、活動施設も十分な状態ではない。それでも、今回のような快挙を成し遂げた 3 名の学生に対するコーチングの報告と共に、女子陸上競技部（以下、女子部）の現状と課題について報告したいと考えている。

2 3名の実績

2.1 3名のこれまでの実績

3名の競技実績は、表1・2・3のとおりである。藏重は表1に示されるとおり、高校時代に2度の日本一に輝き、その年代でのトップアスリートであった。岡根は表2に示されるとおり、大学入学まで特に目立った競技実績はなかった。奥野は表3に示されるとおり、高校3年次に一度全国入賞があった。記録だけを見ても、競技実績と同様に藏重はその年代においてトップクラスの記録を持っており、一方、岡根・奥野はやっと12秒を切るレベルであった。

表1 藏重みう 年次最高記録と主な全国クラスの大会成績

年度	学年	記録	主な全国クラスの大会成績
2016	小6	13秒02	全国小学生交流大会6位
2017	中1	12秒78	ジュニアオリンピック出場
2018	中2	12秒59	ジュニアオリンピック出場
2019	中3	12秒12	全日本中学選手権大会・国民体育大会準決勝
2020	高1	11秒86	全国高等学校陸上競技大会2020 B決勝1位
2021	高2	11秒58	全国高等学校選手権準決勝 U18日本選手権1位
2022	高3	11秒73	全国高等学校選手権1位 国民体育大会2位
2023	大1	11秒63	日本選手権・特別国民体育大会3位 日本インカレ1位

表2 岡根和奏 年次最高記録と主な全国クラスの大会成績

年度	学年	記録	主な全国クラスの大会成績
2016	中1	13秒83	全国大会出場経験なし
2017	中2	12秒83	全国大会出場経験なし
2018	中3	12秒19	全日本中学校選手権大会出場
2019	高1	12秒14	全国大会出場経験なし
2020	高2	11秒95	全国高等学校陸上競技大会2020 B決勝4位
2021	高3	11秒94	全国大会出場経験なし
2022	大1	11秒79	日本学生個人選手権出場 日本インカレ準決勝
2023	大2	11秒55	日本インカレ2位 日本学生個人選手権3位

表3 奥野由萌 年次最高記録と主な全国クラスの大会成績

年度	学年	記録	主な全国クラスの大会成績
2016	中1	13秒42	全国大会出場経験なし
2017	中2	12秒89	全国大会出場経験なし
2018	中3	12秒34	全日本中学選手権・ジュニアオリンピック出場
2019	高1	12秒29	国民体育大会出場
2020	高2	12秒00	全国高等学校大会2020 出場
2021	高3	11秒83	全国高等学校選手権 6位
2022	大1	11秒71	日本学生個人選手権 準決勝
2023	大2	11秒58	日本インカレ 3位 日本学生個人選手権・特別国民体育大会 6位

表4 3名の100m自己歴代記録10傑

	藏重	PB11秒58	岡根	PB11秒94	奥野	PB11秒83
1	11秒58	2021年	11秒55	2023年	11秒58	2023年
2	11秒63	2023年	11秒66	2023年	11秒59	2023年
3	11秒65	2023年	11秒70	2023年	11秒62	2023年
4	11秒66	2023年	11秒73	2023年	11秒65	2023年
5	11秒68	2023年	11秒74	2023年	11秒67	2023年
6	11秒69	2023年	11秒75	2023年	11秒71	2022年
7	11秒71	2023年	11秒77	2023年	11秒73	2023年
8	11秒72	2023年	11秒78	2023年	11秒75	2023年
9	11秒73	2022年	11秒79	2022年	11秒81	2023年
10	11秒74	2023年	11秒80	2023年	11秒83	2022年

表5 3名の大学入学前までの100m自己歴代5位記録

	藏重	岡根	奥野
1	11秒58 2021年	11秒94 2021年	11秒83 2021年
2	11秒73 2022年	11秒95 2020年	11秒85 2021年
3	11秒75 2021年	11秒96 2020年	12秒00 2020年
4	11秒76 2022年	12秒03 2020年	12秒02 2021年
5	11秒78 2021年	12秒09 2020年	12秒06 2020年

2.2 2023年シーズン

前年度の日本選手権リレーでの優勝メンバー（岡根・青山・奥野・井戸）が全員残り、アウトドアシーズン前の2月5日に開催された日本選手権室内60mにおいて、岡根が自身初の全国大会入賞となる第6位に輝き、女子部として幸先のいいスタートを切ることができた。しかし、その4日後の2月9日に、女子部の中心選手でもある東京オリンピック出場経験者の青山華依が前十字靭帯断裂などの大怪我により離脱した。残るメンバーは2022年全国高校総体女子100mで優勝した藏重みう（中京大中京高校卒）を新入生として女子部に迎え入れ、青山華依の復帰試合には最高のメンバーでリレーを組むことを新たな目標として掲げ、これまでの知見などを元に新たなコーチングの仮説のもとトレーニングに励み、これまで以上に成果を収めることができた。表4・5のとおり、岡根と奥野の2人は従来の自己記録を大幅に更新し、表6のとおり、全日本クラスの大会で決勝に進む機会が増え、藏重に関しては、高校までは実績があったものの、シニアカテゴリーで予選通過することがほとんどなかったが、本来の力をシニアカテゴリーで発揮できるようになってきた。

表6 3名の2023年度主要競技会成績

大会名	藏重	岡根	奥野
出雲陸上（吉岡隆徳記念）	5位	5位	4位
日本学生個人選手権	B決勝1位	3位	6位
織田幹雄記念国際	B決勝3位	予備予選	B決勝7位
関西インカレ	1位	2位	200m出場
日本選手権	3位	準決勝まで	準決勝まで
布勢スプリント	7位	B決勝1位	6位
田島直人記念	5位	1位	3位
富士北麓ワールドトライアル	B決勝1位	2位	200m出場
関西学生新人	エントリーなし	1位	200m出場
日本インカレ	1位	2位	3位
特別国民体育大会	3位	準決勝	6位

3 本学陸上競技部

3.1 創部と歴史

本学陸上部は1923年に創部され、今年度で創部100周年を迎える学園最古の課外活動団体としての歴史と伝統を誇っている。現在、在校生の青山華依をはじめ、旧制甲南高校卒業生を含めると複数のオリンピックを輩出している。2018年度には、本学陸上競技部の卒業生団体「秀峰

会」の意向で、学内の所定の手続きを経え男女が別の課外活動団体になった。

3.2 女子部の独立と実績

2018年度には「秀峰会」の意向で、男女別の課外活動団体となり、女子部として独立した。表8・9のとおり、女子部が独立する前、筆者がコーチングに関わるようになってからの主な競技成績は、関西学生陸上競技対校選手権大会（以下、関西インカレ）において4×400mリレー5連覇をはじめ、リレー種目を中心に日本・関西インカレで入賞している。個人種目では、日本インカレ2011年100m、2015年100mHでの2位が最高成績である。2018年度以降女子部は、2020年東京オリンピック4×100mリレーの日本代表選手を輩出し、表7・8のとおり、日本インカレなどで4×100mリレーで上位入賞を続けている。

3.3 活動状況

現在の部員数は24名（4年生をのぞく）であり、在籍学生は、短距離・跳躍種目だけで長距離や投擲などの学生はいない。活動の拠点は本大学六甲アイランド体育施設で、週5日約3時間トレーニングを実施している。

4 現場でのコーチング

4.1 コーチングの転機

筆者は、2020年1月に50歳となり、その年の4月に青山華依が本学に入学してきたことを受け、残りの教員人生において新たな目標を打ち出すことにした。これまでの大学施設を活用した普及活動の研究から、現役時代の経験を生かして走りの研究に専念することを考えた。特に、現役時代、一番活動時期が短い種目でありながら、世間の注目を集めた100m走に焦点を当てたコーチング研究に専念することとした。青山華依は高校2年生でありながら、日本選手権3位入賞や大学入学直前の3月30日宮崎で開催された競技会で、悪天候の中11秒56の自己記録の更新など素晴らしい実績を引き寄せて本学に入学した。本学入学後、彼女との対話を通じて、トレーニングメニューや調整・コンディショニングなどを決めて実施した。個別の学生と対話を通じて、トレーニングメニューを決めていくことは、筆者自身も初めての経験であった。このように、彼女のこれまでの実績や考えを踏まえ、共同でトレーニングプランを検討していくことになった。特に、コンディショニングの重要性を共有し、トレーニングとコンディショニングのバランスを取ることの重要性を強調していった。彼女も自らの体調や疲労度を把握し、積極的にコンディショニングに取り組んでおり、彼女の特徴に合わせたアプローチを通じて、トップアスリートとしての潜在能力を最大限に引き出せるコーチングが本学でも可能になるのではないかと考えるきっかけとなった。しかし、女子部には100m以外の種目の学生も所属しており、研究と並

行して女子部としてチームマネジメントを中心とした幅広いコーチングも行わなければならない。100m に特化したコーチング研究は、筆者自身が研究に専念することで専門性を保つことができる一方で、学生からは 100m の学生とのコーチングの差別化に対して不満などが口にされていることも事実であった。このような環境下でコーチングのバランスを保ちながら、3 名が各自の得意分野で最大限に成長できるような環境を作るように心がけてきた。

4.2 年間スケジュールの固定化

2021・22 年度のシーズン経験を踏まえ、特に 2022 年度の青山華依のシーズンを通しての反省を参考にし、2023 年度におけるコーチングを展開している。青山華依は、2022 年 4 月日本学生個人選手権女子 100m 準決勝で 11 秒 47 の関西学生記録を樹立し、決勝でもこれまでの自己記録を上回る 11 秒 50 で優勝を果たしたが、その後、シーズンでレースを重ねるごとに、筋力の低下などから、彼女の長所が発揮できにくくなった。この反省から、3 名に対して年間を通じての筋力トレーニングは不可欠であるとの考えから、シーズン中も継続的な筋力トレーニングを実施するようにしている。このアプローチは、3 名が年間を通じて筋力を維持し、競技シーズンを通して最良のパフォーマンスを発揮できるようにするための重要な措置であった。計画的な筋力トレーニングを通じて、シーズン後半の疲労やパフォーマンスの低下を最小限に抑えることを目指している。実際、シーズンが進むにつれて 3 名は疲労を蓄積しやすくなるため、筋力トレーニングを継続することで、疲労も軽減し、安定した走りの維持ができるようコーチングを行っている。また、3 名の動きや今年度からスタッフに加わったコンディショニングコーチからの助言などのも柔軟に対応している。その結果、バランスの取れた筋力トレーニングは、怪我のリスクを減少させ、同時に全体的なパフォーマンスを向上・維持させることができた。この取り組みは、3 名にとって有益であると確信し、次年度も継続的に取り組みたいと考えている。

4.3 調整のアレンジ

3 名の走りや筋肉の特性や調整の必要性を丁寧に考慮し、コンディショニングコーチの助言のもとにて 3 名に対して最適な調整プランを考えている。3 名それぞれが持つ個別の特長や課題に焦点を当て、トレーニングや調整の方法を考え、体力、技術、メンタル面など、多岐にわたる要素を考慮しながら、3 名が最も効果的に成長し、パフォーマンスを向上させられるよう工夫している。これらのアプローチを通じて、3 名の潜在能力を最大限に引き出し、シーズン全体での安定したパフォーマンスをサポートしている。調整のアレンジは、3 名の目標に向けて最良の状態に挑めるようになる手助けとなっている。今後も変化する状況に柔軟に対応し、3 名の成長を継続的にコーチングしたいと考えている。

4.4 記録測定や量的な走り込みの抑制

記録測定や量的な走り込みを極力減らすトレーニング内容に変更している。単なる数字や距離にこだわるのではなく、より質の高いトレーニングにフォーカスし、3名が実戦での力を最大限に発揮できるようなトレーニング環境を目指している。実践に近い状況でのトレーニングを通じて、競技に必要なスキルや反応の向上に集中している。そのことで、実際の競技場面を模した状況でのトレーニングにより、3名が実践的なスキルを身につけ、試合でのパフォーマンス向上に繋がられるようになってきている。競技力が近いメンバー同士でのトレーニングを重視し、競争や協力を通じて、3名がお互いに刺激を受け、共に成長するプロセスが加速している。これにより、3名が競争心を養いつつ、協力して困難な状況にも対処できるようなアスリートへと成長し始めている。

4.5 リレートレーニング

400m リレーの特性を活かしたランニングトレーニングは最も重要なものと位置づけている。リレートレーニングを取り入れることで、通常のトレーニングでは得られないランニングの局面や心理的な負荷をかけることができると考え、これをチームの伝統的なトレーニングとして実施している。このトレーニングでは、単なる個々の走力向上だけでなく、女子部全体の現状や課題を明確に把握することが可能となる。そのため、女子部全体でのコミュニケーションや連携を強化するために積極的に取り入れている。学生たちがお互いを理解し、信頼し合うことがスムーズで効果的なトレーニングを可能にするために不可欠である。今後もコミュニケーション、ランニング、およびバトンパスの向上に焦点を当て、より高い競技力を追求していくことができると考えている。

5 現状と課題の対策について

2022年度青山・2023年度3名は、全日本クラスで出場可能な試合は、ほぼ出場して様々な経験を積み、課題を抱えながらも成長を遂げてきた。ただし、3月から10月の長いシーズンで、最後の一月になると全ての選手が息切れ状態で完全に疲れた状態に陥ってしまった。2024年度以降は、各学生が最適なコンディションで活躍できるような試合配置が求められ、各学生の得意な種目や調整状況を考慮し、柔軟で戦略的な試合配置を検討する必要があると考えている。そのことで、チームの総合力が向上し、リレー種目へと繋がる可能性がある。一方、上記の競技会などに出場機会がない学生などの競技会エントリーは、従来どおり個人にまかせる方針に変わりはないが、一定の期間ごとにエントリー競技会を決め、トレーニング・試合の目的意識を高める必要がある。また、対校戦での出場メンバー選考の透明性と公正性を確保するために、選考基準を確立する必要がある。これまで、SNSなどでもしっかりと選考基準を伝えてきたつもりだが、2023年度、そのような選考に関することを理解していないと学生・保護者からの説明依頼があったことがある。2024年度も、これまでどおり、日本インカレ・関西インカレは、大学のベス

トメンバーで臨み、西日本インカレ・兵庫インカレ・対学習院戦は、これまでどおり出場機会が少ない学生を中心にメンバー構成する方針で考えている。リレー種目に関して、4×100m リレーは、100m の力に加えて、200m24 秒台もしくは 100mH で 13 秒台が基準となり、4×400m リレーは、400m の力に加えて、これまでどおり 200m25 秒 50 が基準と考えている。ただし、日本インカレ女子 100m 上位 3 名の学生がいることもあり、学生の実力とトレーニングの成果を明確な基準で評価し、透明性のあるメンバー選考プロセスを導入する必要がある。個々の学生が自身のポテンシャルを理解し、成長に向けた目標を共有できる環境を整備する必要があると考えている。このような課題がある中、現場でのコーチング体制がほぼ筆者一人であることがトレーニングの継続性に悪影響を与えていることもある。特に、競技シーズンが始まると全国レベルの競技会に出場する学生のコーチング研究で帯同することが多くなり、その競技会に出場しない学生から、研究の意味を理解されず、特定の学生のみに対応するといった不満や批判を受けることがある。簡単なことではないが、大学に対して、指導者不足の解消や新たな指導者の獲得に向けた取り組みを提案していかねばならないと考えている。学生のコーチングプログラムの導入や協力体制の構築など、指導者が不在の際でもトレーニングが継続できるような対策が必要であり、大学が競技者の総合的なサポートを行うことが求められている。筆者が 30 年前に卒業した東海大学では、その頃、既に各専門種目に専門の指導者がいた。このため、大学では専門知識を持つ指導者がそれぞれの競技種目を担当し、他の種目については関与せず、学生が能力を最大限に発揮できるよう専念すべきだと考えている。実際、走高跳で日本インカレ 2 位や国民体育大会で入賞した本学女子陸上部の松本まりんなどは、このアプローチに基づいたコーチングが功を奏していた。ただし、高校までの指導者のように、大学でも幅広い指導を受けるものと期待する学生や保護者からは、専門競技以外に対する指導を求める声もある。これについては入部時に説明はしているものの、明文化して文書として残す必要性を感じている。また、大学入学前までの学生は、ティーチングを主体とした環境で競技生活を送ってきたため、陸上競技に関する組織運営や事務作業に不慣れである。部内でのミーティングを通じて役割を明確にしようとしているが、まだ機能していない実態がある。したがって、課外活動団体としての、役割を果たせない場合はトレーニング参加に制約を設けることもある。部の運営の健全化のために、本学の体育会所属団体としての役割を明確にし、必要なサポートやリソースを確保するための対策を講じ、体育会団体としての意識向上が必要である。一部の学生や保護者には体育会団体としての役割などを重視するとしている大学・筆者の方針が伝わっておらず、その役割をすることなどでモチベーションやトレーニングへの参加に影響を与えているとの主張もある。今後、筆者と学生とのコミュニケーションを強化し、個別のフィードバックや相談の機会を増やすために、新たな取り組みを 2023 年度シーズン終了後から開始した。その中で、約 20 時間の個人時間の重要性を説明している。これまで、校則のもとに決められた時間帯は、学校の敷地内で活動していた中・高校などとは異なり、本学では 1 日のうち、トレーニングする時間は 2～4 時間程度である。それ以外の約 20 時間の個人時間を理解・行動できる学生とそうでない学生がいると考えられる。20 時間の個人の時間を有効に活用する方法について、理解・行動できる学生は、良いトレーニ

ングの取り組みや競技結果が出ている。個人のトレーニングや自己管理の重要性を強調していかなければならないと感じつつ、私自身、ティーチングよりもコーチングが重要と考えているため、ティーチングをどこまで取り入れるかが悩むところである。ある意味、この時間の考え方が、トレーニングよりも重要であると考えている。また、女子部では、毎試合ごとに試合報告書というレポートを提出してもらっている。その報告書の内容は、試合後ということもあり、多くの課題が書かれている。そのため、課題を達成するために、トレーニングメニューを個々に任せる時間を増やすことを行った。しかし、メニューが出ない、大きな競技会に出場する学生だけにはメニューが出るなどという意見が出るなど、私が考えていたコーチングにはならなかった。その反省をもとに、2024年度のシーズンに向けて新たなアプローチに取り組んでいるが、年齢が若い、競技歴が短いなどでは有効であり、大学生ぐらいになると有効性が低くなるとされるティーチングを求める傾向が強いということがわかった 1 年間でもあった。競技成績を安定して出せている学生のようなコーチングができるように少しずつ理解させていく必要を感じている。また、女子部内での競技成績の格差により、試合への参加が学生の競技レベルによって異なるケースが増えてきている。試合に参加機会が少ない学生に対して、これまでは個々で課題を見つけた内容をトレーニングとしてしっかり実施してもらうことで、より方向性へ導けると考えていたが、結果的には、メニューを出してくれないなどの不満に繋がってしまったことから、個別のニーズや目標に応じたコーチングを考えつつ、ティーチングを少し実施しながらコーチングへとつなげる工夫が必要であるとも考えている。実際のトレーニングに関しては、3名が一定の成果を収めてくれたので、その成果をトレーニングの柱として実施していく。そのような中、前十字靭帯断裂という大きな怪我をした青山華依が復帰レース後、「痛くても頑張ったら走れる体ではなく、もう完全に走れない体になってしまったので、それを受け入れられることをやるしかなかった」という発言を聞いた。このことは、筆者にとって衝撃的で、彼女の 2023 年 2 月 9 日以降のことを思い出し、なぜ、最短期間で復帰することができたかを考えた。どんな素晴らしいトレーニングがあったとしても、まずはそれができる体作りをする必要性を痛感し、チーム全体のスピードアップと安定性を促進するため、専門的でなくより基礎的な部分の筋力アップが必須だと考えた。青山華依が実施してきたリハビリと今後のリハビリメニューを積極的に、全員のコンディショニングトレーニングプログラムとして導入することにより、女子部全体が、高いパフォーマンスを達成できる下地ができると考えている。このように、トレーニングよりもチームマネジメントが女子部として、大きな課題となっているため、より良いチームマネジメント・コーチングが必要となってくると考える。

6 今後のチーム構成と展望

女子 100m での独占を達成した 3 名が次年度も女子部に残ることは、今後の活動において非常に重要な要素である。今回の成功により、女子部は大会などにおいて非常に強力な部の編成を実現できると考えられる。特に、インカレは同一校からの出場者人数が制約される中で、これら

の3名の選手が引き続き同じ女子部に残ることで、戦略的な有利な状況が生まれ、競技力の高い選手を一つの部に集結させ、その強力な組み合わせを活かして女子部としての競争力を飛躍的に向上させる可能性がある。これにより、選手たちは個々の力を最大限に発揮するだけでなく、女子部全体としても協力し合い、戦略的な競技力を構築することが期待される。3名の選手が引き続き協力し、共に成長し、団結した強力な部を形成することで、今後の大会での成功が期待されている。その一方で、青山華依の前十字靭帯断裂からの復帰が実現し、次年度、新たな競技力の新入生部員も加わる見込みである。青山の復帰は女子部にとって大きな活力となり、彼女の實力と経験が女子部全体の強化に寄与することが期待されている。同時に、新入生の加入により、女子部内の競争が一層激化することが予測される。新入生が持つスキルやポテンシャルは、既存部員に新たな刺激を与え、個々の競技力向上につながると考えられている。競争が激化することで、学生たちは自らの限界を挑戦し、日々のトレーニングや試合でベストを尽くす動機づけとなることも期待されている。このような競争的な状況は、学生たちにとって成長の機会であり、全体としての団結力やパフォーマンス向上につながるであろうと考えられる。新たな部員も加わり、お互いが協力し合い、個々の強みを生かしつつ、共通の目標に向けて進むことで、より強固で競技力の高い女子部を築いていくことが期待される。

7 おわりに

筆者が本学に赴任したのが2001年4月であり、本格的にコーチングを開始したのは翌年2002年度からである。新入生3名と既存の3名の学生、計6名でスタートしてから22年の年月が経過した。この期間、一定の成果は出せていたが、筆者自身のコーチングに対する勉強不足などがあり、多くの学生・関係者に迷惑をかけてしまった。また、他大学との比較から見て、トレーニング環境や入試制度、金銭的な援助システム、そしてトレーニング施設などが整備されておらず、筆者自身もコーチングに限界を感じていたのは確かであった。ただし、たった一人の学生（青山華依）が入学してくれたことで、それまで単なる課外活動でのコーチングであったものが、100mを追求するコーチング研究へと変わった。これまでのコーチングとは全く異なるものであり、学生にも既存のコーチングへの考えがあり、全ての学生に当てはまるものではないが、今回報告させていただいたとおり、3名などは確実に成果が出てきていることから、今後もこのコーチングを追求していくことで、女子短距離に対するコーチングへの提言ができるのではないかと考えている。

謝辞

最後に、この場を借りて、コンディショニングを担当して下さっている雲晴様と女子部監督の坂井様に深く感謝申し上げます。雲晴様には、いつもの的確なコンディショニングアドバイスで学生を支えていただき、心から感謝しています。坂井様には、学生たちの課外活動団体としての事

務作業やメンタル、学習指導に対する献身的なサポートに心から感動しています。お二人のおかげで女子部は団結し、成長しています。これからもお力添えいただけることを心より願っており、改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。

表7 本学女子陸上部 日本選手権リレー及び日本インカレの成績

日本選手権リレー					日本インカレ			
4×100m リレー			4×400m リレー		4×100m リレー		4×400m リレー	
年度	順位	記録	順位	記録	順位	記録	順位	記録
2023	1位	44"82	予8位	3'53"94	1位	44"72	予2位	3'45"58
2022	1位	44"72	予7位	3'50"23		失格	8位	3'43"17
2021		中止		中止	3位	45"86	予2位	3'52"96
2020	5位	45"72	予4位	3'47"55	2位	45"97	予3位	3'49"13
2019	4位	45"35	予4位	3'45"21	3位	45"53	予5位	3'49"49
2018	5位	45"80	予4位	3'42"69	5位	45"14	予4位	3'50"02
2017	6位	45"99	予4位	DNS	予2位	46"74	予2位	3'45"02
2016	3位	45"16	予6位	3'45"41	7位	46"18	予6位	3'46"75
2015	3位	45"06	予6位	3'43"89	2位	45"49	予5位	3'50"78
2014	3位	45"93	予5位	3'44"54	予2位	46"44	4位	3'41"41
2013	予6位	46"92	予4位		予3位	46"95	予5位	3'49"20
2012	4位	46"55	予6位	3'53"65	予5位	46"25	予2位	3'46"13
2011	3位	45"76	予6位	3'48"66	2	45"97	6位	3'43"05
2010	予5位	48"64	予8位	3'50"31	予3位	47"71	6位	3'43"31
2009	予8位	48"15		DNS	予4位	47"56	7位	3'45"82
2008			準7位	3'53"46	予3位	48"11	予3位	3'47"92
2007	準5位	47"29	準5位	3'46"45	8位	46"72	4位	3'45"29
2006	4位	47"10	準7位	3'52"58	6位	46"31	7位	3'52"31
2005		DNS	準5位	3'50"70	予3位	47"37	予2位	3'50"37
2004	5位	47"54	準4位	3'51"30	8位	47"26	6位	3'50"73
2003			4位	3'48"13			予4位	3'54"62
2002					予5位	48"73	予6位	3'59"23

表8 本学女子陸上部 関西インカレの成績

関西インカレ				
4×100m リレー			4×400m リレー	
年度	順位	記録	順位	記録
2023	1位	44"83	4位	3'47"58
2022	2位	45"22	予4位	3'54"31
2021	1位	46"05	4位	3'48"71
2020	1位	45"56	4位	3'46"48
2019	8位	54"91	4位	3'44"30
2018	1位	45"01	4位	3'47"08
2017	1位	44"98	3位	3'44"77
2016	2位	45"46	2位	3'42"49
2015	2位	45"36	2位	3'39"80
2014	1位	45"89	3位	3'45"28
2013	3位	46"90	4位	3'46"03
2012	1位	46"53	2位	3'44"28
2011	3位	46"63	4位	3'46"64
2010	1位	46"56	1位	3'44"03
2009	1位	46"59		DNS
2008	3位	48"00	1位	3'44"54
2007	2位	46"50	1位	3'45"99
2006	2位	46"13	1位	3'47"84
2005	1位	47"12	1位	3'45"76
2004	1位	46"93	1位	3'51"01
2003	8位	49"58	5位	3'56"46
2002	7位	48"60	8位	4'01"81